

絵本の読み聞かせの速さの違いが 子どもの集中度と内容理解に与える影響の分析

井手 彩乃† 松村 敦‡ 宇陀 則彦‡

† 筑波大学情報学群知識情報・図書館学類

‡ 筑波大学図書館情報メディア系

1 はじめに

絵本は子どもが人生において初めて出会う本であり、その多くは親や保育者に読み聞かせをしてもらう体験から始まる。この読み聞かせの効果は「子どもへの読み聞かせ技能に負うことが多い」[1]と言われており、子どもにとって効果的な読み聞かせ手法を検討することは重要な課題である。本研究では、読み聞かせ方法のうち読む速さに着目し、速さの違いが読み聞かせに対する集中度と絵本の内容に対する理解度にどのような影響があるかを明らかにすることを目的とする。

2 手法

2.1 実験概要

読み聞かせの速さが異なる3種類の録音音声（高速、通常、低速）を使用して実験を行った。基準となる通常の速さの読み聞かせ音声は、読み聞かせボランティア経験のある学生の音声を使用した。速さは平均で毎分272.0字である。なお、速い読み聞かせ音声は通常の読み聞かせ音声を1.3倍速、遅い読み聞かせ音声は0.7倍速として機械的に作成したものを使用した。

実験参加者はつくば市内の年長児26名（男児12名、女児14名）である。実験参加者には予めLCスケール（言語・コミュニケーション発達スケール）の「手ごたえ課題」[2]を実施し、言語発達レベルが均等な3グループを作成した。その後、各グループを読み聞かせの速さによって3群（高速群、統制群、低速群）に振り分け、絵本の読み聞かせを行った。なお、読み聞かせ中は、読み聞かせに対する集中度の測定として注視計測を実施した。読み聞かせ終了後には、絵本の内容に対する理解度の測定として理解度テストを行った。

2.2 注視計測と評価方法

視聴コンテンツの制作で活用されているディストラクター・メソッド[3]を使用し、子どもの視線の動きから絵本への注視を計測した。ディストラクター・メソッドとは、注視する対象の横に気を散らすものを設置した環境で、どの程度対象物を注視していたかを計測する方法である。本実験では、絵本への気を散らす役割として絵本から45度の角度にスクリーンを設置し、子どもがどの程度絵本を見ていたかを計測した。

注視計測の評価は次のように行った。7.5秒間全て絵本を見ていた場合に対して3点、50%以上絵本を見ていた場合に対して2点、50%未満絵本を見ていた場合に対して1点、全く絵本を見ていなかった場合に対して0点を付与した。各群の注視の比較には、得点割合として注視率を求めることで統制を行った。

2.3 理解度テストと評価方法

理解度テストは、物語の事象に関する設問5項目と登場人物の心情に関する設問5項目の計10項目から構成される。なお、心情に関する設問には、今井の実験で使用された表情図[4]から「すました顔」を「驚いた顔」に改変したものを使用した。

理解度テストの評価は次のように行った。各設問の適切な回答に対して2点、適切に言い表していないが正答とみなすことができる回答に対して1点、誤答や無答に対して0点を付与した。テストは10項目から構成されるため、20点満点となる。

3 結果と考察

3.1 集中度への影響

各群の注視率の平均を表1に示す。3群の一元配置分散分析を行った結果、 $F(2, 15) = 5.10$, $p < .05$ となり、統制群は他群と比較して注視率が有意に低い傾向となった。

3.2 内容理解への影響

各群の理解度テストの得点平均を表2、表3、表4に示す。理解度テストの全体に対して、3群の一元配置分散分析を行った結果、 $F(2, 16) = 0.59$, $p > .05$ となり、

The influence of differences in reading speed on young children's concentration level and content understanding

†Ayano Ide

College of Knowledge and Library Sciences, School of Informatics, University of Tsukuba

‡Atsushi Matsumura, Norihiko Uda

‡Faculty of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

表 1: 注視計測の結果

	高速群	統制群	低速群
平均	84.30	69.10	83.07
標準偏差	5.88	8.33	10.33
人数	6	6	6

表 2: 理解度テストの結果 (全体)

	高速群	統制群	低速群
平均	12.57	11.50	13.67
標準偏差	2.97	3.25	3.30
人数	7	6	6

表 3: 理解度テストの結果 (事象項目)

	高速群	統制群	低速群
平均	7.71	6.83	7.67
標準偏差	1.98	2.03	1.89
人数	7	6	6

表 4: 理解度テストの結果 (心情項目)

	高速群	統制群	低速群
平均	4.86	4.67	6.00
標準偏差	1.81	2.21	2.31
人数	7	6	6

各群による得点平均に有意差はなかった。同様に、理解度テストの事象項目に対する結果では $F(2, 16) = 0.33$, $p > .05$, 理解度テストの心情項目に対する結果では $F(2, 16) = 0.60$, $p > .05$ となり、いずれも各群の得点平均に有意差は見られなかった。

3.3 考察

注視計測の結果から、読み聞かせの速さが速い場合と遅い場合では読み聞かせに対する集中度が高くなることが示された (表 1)。本研究で設定した通常の見聞かせの速さは、子どもが日常生活で触れる会話速度に近い可能性がある。そのため、日常会話とは異なる速さで読み聞かせを行うことによって、子どもが絵本の読み聞かせに集中する可能性が示唆される。

一方、理解度テストの結果では有意差が見られなかったため、読み聞かせの速さが内容理解に影響を与えているとは言えない (表 2, 表 3, 表 4)。内容理解への影響を測るために作成した理解度テストの設問内容に着目すると、質問に用いた単語を理解できなかった実験参加者が見受けられた。そのため、質問に対する理解力が「速さ」以上に内容理解への影響に関係していた可能性があり、速さによる内容理解への影響は今後も検討が必要である。

ただし、本研究は標本数が少ないため、十分な精度を得られていない。そのため、速さによる影響を今後もより緻密に検証していくことが必要である。

4 おわりに

本研究では、読み聞かせ方法のうち読む速さに着目し、速さの違いが読み聞かせに対する集中度と絵本の内容に対する理解度に与える影響について実験的に検証した。26名の年長児を対象とした読み聞かせ実験を

行い分析した結果は次の通りである。

1. 通常の見聞かせをした統制群は、他群と比較して注視率が有意に低い。
2. 3群間には、物語内容の理解度に有意な差はなかった。

以上により、読み聞かせの速さが速い場合と遅い場合では、読み聞かせに対する集中度が高くなる傾向にあることが明らかとなった。一方、読み聞かせの速さが内容理解に与える影響は今度も検討が必要である。

今後の課題は、より多くの実験参加者を得て緻密な結果を示すことと、理解度テストの内容を再度検討し、内容理解への影響を検証することである。

参考文献

- [1] 中村年江. 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究-2-絵本の読み聞かせが幼児の物語理解に及ぼす影響. 読書科学, Vol. 36, No. 3, pp. p81-88, 1992.
- [2] 大伴潔, 林安紀子, 橋本創一, 池田一成, 菅野敦. 言語・コミュニケーション発達スケール LC スケール. 学苑社, 増補版, 2013. 136p.
- [3] 浜野保樹, 青木繁, 平井出けい子. 教育テレビ番組の制作変数について (1). 放送教育研究, Vol. 10, pp. 115-134, 1980.
- [4] 今井靖親, 桶本真也. 幼児の共感性に関する実験的研究. 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, Vol. 22, No. 1, pp. 185-193, 1973.